

「遠野物語の広がり——魅せられた人々」

柳田國男研究会会員 小田 富 英 氏

1. はじめに

自己紹介と、1月に附馬牛の地区センターでお話した時のレジュメをコピーしてもらいましたので、参考にしていただきながら、早速、今日のテーマに入りたいと思います。

最初に、『遠野物語』発刊100年という年にあたり、柳田國男は、100年という時の流れをどう理解していたのか、あるいは、どんな時に100年を意識したのかを、みなさんにご紹介したいと思います。



柳田が、「100年」という言葉を使っている文章を見つけました。二つありましたが、どちらも、旅に関する文章です。

ひとつは、「旅行の話 その二」（『北国紀行』所収）という昭和22年に発表した短い文章のなかに出てきます。

「自分のこの小さな旅が如何なる因縁を百年後の日本と結び得るであろうかと考える機会にぶつかった。」

この「機会」とは、隠岐で、昔の2人のお坊さんの旅日記を目にしたことを指しています。単なる旅のメモのような旅日記を、時代を隔てて自分が読んでいるが、自分が書いてきた旅日記を100年後の人たちは、どんなことを考えながら読んでくれるだろうかと言うのです。「如何なる因縁を結び得るか」という味わい深い文となっています。

もうひとつが、菅江真澄について書いた昭和3年の「真澄遊覧記を読む」（『雪国の春』所収）の中の次のような文章です。

「而うして問題は如何に菅江真澄の著作ばかりが、ただ独り百年を隔てて今にその価値を認められるかであるが、それには因より学問と文章との、大きな力も与かつて居る。けれどもそのみならば他にも彼以上の人は幾らでも算へられる。我々の珍重すべきは、主としては彼の境遇であり又気質である。五十年近くも故郷を振棄て、あの多感の歌心を雪の孤独に埋没しなければならぬような運命は、さう多くの旅人の持つて生れることの出来ぬものであつた。」

菅江真澄とは、江戸時代後期の旅行家で、30歳の時、故郷三河を出て、信州、東北、そして蝦夷地を旅して膨大な観察記録を残した人です。角館でその人生を終えますが、謎も多い人ですね。柳田は、この真澄の年譜を作るのが、生涯の夢だと言っていた時期があるほどです。

この柳田の真澄について書いている文章を、そのまま、柳田國男の『遠野物語』と置き換えて読んでみたいと思います。そうすると、このようになります。

なぜ、柳田國男の『遠野物語』だけが、ただ1冊だけ100年の時を隔てて読み継がれているか。それは、もとより柳田の学問と文章力が大きな力となっているけれど、それだけでなく、柳田の境遇と気質にあるのではないかと、このようになってきます。

菅江真澄は、故郷を棄て、ただひとり孤独の生活をしながら、膨大な旅の記録を残したわけで、柳田と

は、比較できないと思われるかもしれません。柳田の実生活を考えれば、孤独ということはあてはまらないのではと思われるでしょう。しかし、学問の世界、あるいは、柳田がやりたかったことと時代との関係で言えば、ある意味、柳田は、孤独だったと言えます。実生活でも、故郷を棄てたということでも、真澄と同じなのです。そう考えると、この柳田の文章をそっくりそのまま、柳田に返すことができるのです。『遠野物語』発刊100年を迎えるにあたって、柳田の学問、文章力、そしてそれ以上に、柳田の「境遇と気質」を考える必要があることを強調したいと思います。100年後の人たちと、どんな因縁を結ぶかと、柳田から挑発を受けているわけですから、私たちは、それに応えていかなければならないと思います。

今日の私のお話は、「『遠野物語』の広がり一魅せられた人々」ということで、「遠野物語」が存在したことによって、どのような変化、反響があったのかを、「人脈の広がり」「読みの広がり」、研究の深まりと言ってもよいかもしれません。そして、「創作の広がり」の三つの視点からお話します。

今までのことと言いますと、発刊80周年の時は、遠野常民大学の方たちによって、『遠野物語』批評集が作られていますし、私の先生、故後藤総一郎さんが、遠野で賞をいただいた時の講演で、「『遠野物語』評価史」を話したかと思います。あと、遠野物語研究所の主幹研究員の石井正己さんが、350部の『遠野物語』の行方を追って、何番の本がどこにあるという追究をされています。今日の話でも、あとで触れるつもりです。

こうした、今までの研究も参考にしながら、エピソードなどを交えながらお話していきたいと思います。

2. 『遠野物語』の同時代的な人脈の広がり

さて、『遠野物語』というと、最初に語られるのが、柳田國男と佐々木喜善の出会いですね。この佐々木喜善を柳田の家に連れて行ったのが、水野葉舟という人で、この3人の出会いは、小説や劇になっているほどです。私は、水野葉舟についても興味があり、息子さんの清さんの許可をいただいて、日記を見て、葉舟論も発表したことがあります。

葉舟という人もおもしろい人で、詳しく話していると時間が無くなりますので、別の機会に回しますが、そのなかで、私は、高村光太郎と水野葉舟が「無二の親友」とお互いよびあっているほどだということを知ります。関東大震災後に、葉舟は、1人で、千葉県三里塚、今の成田空港の所に、小屋を建て、移り住むのですが、こういうことで、日本の知識人のアウトドア派の先駆だとも言われるくらいです。そして、光太郎との関係で言うと、この小さな小屋は、光太郎が、自分の詩集の挿絵画家の仕事場のつもりで建てた小屋と言われているほど深い関係なのです。

研究したばかりの頃、高村光太郎と水野葉舟の往復書簡が刊行されて、そこで気づいたことで、今までも機会がある度に紹介してきたのですが、みなさんあまり注目されていないことがあります。それが、最初の資料です。

「昭和六年

八月五日 はがき

此間染谷さんといふ方から“児童文集”をもらひました。時々読むのをたのしみにしてゐます、二三日うちに岩手県の方へ旅行にゆかうと思つてゐますが此本も行李へ入れてゆきます、遠野物語の地方へゆくわけですが多分遠野や盛岡へは廻れないでせう。重に海岸地方をまはります。今年は割に涼しい夏ですが畠や何かにはいけないのでせう。皆さまの御健康をいのります」

染谷という人は、名前を四男也とって小学校の先生です。染谷たちは昭和3年に印旛郡国語教育研究会をつくり、葉舟を講師に招き、親しくなります。このあとずっと光太郎だけでなく、柳田の自宅などにも訪れ、葉舟から頼まれた用件などを伝えるメッセンジャー的な役目をよくしていた人です。「児童文集」というのは、葉舟が、鈴木三重吉の『綴り方教育』に対抗して、選ばれた作文だけを載せるのではなく、普通の子のそのままの作文を集めて作った『印旛郡児童文集』のことです。頻繁に、葉舟と光太郎は連絡

をとっていたことがわかると思いますが、岩手県に旅行に行くという時に、「遠野物語の地方へゆく」という言い方をしているのがおもしろいですね。昭和6年ですから、世にでている『遠野物語』は350冊しかないの、葉舟から借りて読んだか、古本屋で買ったかしたものなのでしょう。

葉舟から本を借りて読むということは、他の手紙にも出てきます。次のは、敗戦後の昭和20年10月、ここ遠野からすぐ近くの稗貫郡太田村に鉾山小屋を移築して移り住んだ光太郎が、物心両面で山村暮らしを支えようとした葉舟に宛てたお礼の葉書です。

「昭和二十年

十月十五日 岩手県稗貫郡太田村字山口山口分教場気付 光太郎

「稗の未来」といふ本おもしろく読みました。読了したので別封で返送します。尚稗の栽培方面のパンフレットがみたいものです。混食によいといふブンズ豆といふのは先年東京にみた時いただいて試食、大変おいしかった事を思出しました。ブンズ豆とは何豆の事か。来年小生も栽培したいのですが種子用としておついでに少しばかり送つてくれませんか。明後日晴天ならばいよいよ山へ行くので準備にかかっています。郵便は以後表記へ願います。」

「稗の未来」とは、昭和14年、米の統制が始まるなど、食料事情が悪くなる一方の時期に、『稗叢書』の1冊として柳田が書いた小冊子のことです。光太郎の自給自足の生活を助けるために、葉舟が読むことを進めたのでしょう。

高村光太郎は、生前の宮沢賢治とのつき合いもあります。『注文の多い料理店』を理解している数少ない当時の読者のひとりです。賢治が亡くなってからも、宮沢清六さんとの付き合いを高村光太郎がしていたのは、そういう関係です。

それから、宮沢賢治と佐々木喜善も、これも友人関係と言って間違いないと思いますね。国際共通語のエスペラントについても、意気投合して、お互いに病弱ですので、病状を見舞いながら、交流していたのは、みなさんご存じの通りです。昭和8年に1週間の違いで亡くなってしまうという不思議な関係の2人です。

そして、宮沢賢治と柳田國男ですが、生前交流はありませんが、賢治が柳田の仕事を意識していたということは、もう間違いのないこととしていろいろと語られています。私は、以前、柳田の兄、井上通泰の娘さんの坪内泰子さんから、子供の頃、國男おじさんから、面白いから読みなさいと『注文の多い料理店』をプレゼントされたという話を聞いたことがあります。柳田の側からもつながっているのだと、驚いたことを覚えています。

そうすると、水野葉舟と高村光太郎、それから高村光太郎と宮沢賢治、宮沢賢治と佐々木喜善、その関係を水野葉舟、佐々木喜善、柳田國男の三人の関係図のところに乗せさせていただきますと、きれいに円で広がっていく関係になります。これを、意識するのとしなないのでは、日本の近代の文学、あるいは昭和の初め頃の思想関係も見えてこないのではないかと私はかねがね思っているのです。

なかなかそこを評価されなくて、今日はみなさんに、そういう見方もあるのかと思っていただければありがたいと思っています。

これが、『遠野物語』を発刊してからのひとつの「知の循環」というか、「関係の円環性」です。

3. 『遠野物語』以降の人脈の広がり

それから、刊行された後の『遠野物語』の評価ですね。先ほど、80周年の時に、遠野常民大学でパンフレットを作ったという話をしましたが、今ではなかなか簡単に読むことができない、田山花袋、島崎藤村、泉鏡花、さらには、中国の魯迅の弟で、このところ注目されはじめた周作人などの批評を集めた小さな冊子のことです。話題にもなっていますので、今日は触れません。ただひと言だけ言っておきますと、田山花袋と柳田國男の関係です。確かに、花袋の『蒲団』に対しての柳田の評価と、柳田の『遠野物語』に対しての花袋の評価をみると、その当時、かなりのズレがあったことがわかりますが、生涯にわたっての友

人関係にヒビが入るほどのものだったかと言えば、そうでもありません。田山花袋は死ぬまで柳田を友人として認めていますし、柳田もまた花袋が考えていることが徐々に成長していく中での、一過性のものと思っているようです。一概にけんか別れと評価するのは、ちょっとずれているのではないかと思います。それよりも、藤村との関係は、ある事件から切れてしまいますが、『遠野物語』の関係で言うと、藤村は、大正13年以前に、古本屋に売ってしまいます。それを買ったのが、中野重治です。これは、有名な話ですが、柳田が知ったかどうかは不明ですが、中野重治が語った可能性は多いにあります。

もうひとつの評価のつながりで、なかなか話題にならないことが、桑原武夫の『『遠野物語』から』という昭和12年に『文学界』という雑誌に書かれた文章のなかに隠されています。桑原については、また後でお話したいと思うのですが、隠されていることを先にお話します。それは、芥川龍之介のことで、

その『『遠野物語』から』の最後の方に、『『遠野物語』はまず何よりも、一個の優れた文学書である。しかるに一人の芥川龍之介をのぞき、わが国の文学者にして、この物語の美を認めたものないのは私の不思議とするところであった』という文章があります。ということは、『遠野物語』を評価していたのは、桑原武夫が判断すると芥川龍之介1人だけだということになります。1人だけというのは大げさな言い方かもしれませんが、桑原の思いから出た言葉なのでしょう。では、芥川龍之介はどのようなふうに『遠野物語』を評価していたのかと疑問に思われるかと思えます。だいたい、『河童』という芥川作品から、「あ、これが柳田の影響だろうな」というように思われると思うのですが、芥川がいつ『遠野物語』を読んだのかということからお話してみようと思えます。

これは先ほども話したように、350部のうちの何番が、何処にあるかというのを追っている石井正己さんも触れていることなのですが、芥川は、出たばかりの年にもう読んでいるということがわかっています。ちょっとおもしろいエピソードがあるので、ご紹介させていただきます。

レジュメの「資料②」をご覧ください。たぶん、みなさんの中でアイヌ語に関心をお持ちの方は多いと思いますので、山田秀三さんという名前は聞いたことがあるでしょう。本も読んだことがある方がいらっしやると思うのですが、山田秀三さんという方は、もともと官僚だった方ですね。柳田よりずっと後ですけども、農商務省で、辞める時は通産省の官僚だったのですが、平成4年に93才でお亡くなりになっています。敗戦後すぐくらいの時に、今までの官僚生活を投げ捨てて、仕事を辞めるんですね。それで、何を始めようかという話になったときに、今までずっと仙台の鉱山監督局の局長をやったり、内閣官房の調査官や東北局長をやったりしていたのですが、北海道や東北を回った時、おもしろい地名があるのはいったい何なのかということに疑問に思っていたわけです。それで、アイヌ語地名について調べようと決意したということを書いています。その時、自分はアイヌ語地名について調べたいのだけど、どこから手をつけたらいいかわからないということを、奥さんに言ったら、奥さんが本棚から1冊の本を持ってきて、この本がヒントになるかもしれないと言ったそうですね。その本が、『遠野物語』で、うしろに芥川の自筆で、「一九一〇年十一月三日 芥川文庫」と書いてあったということです。この時、芥川龍之介は18才です。一高に入学したばかりの秋ですね。どこかで『遠野物語』を買ったのか、あるいは誰かからもらったのか分かりませんが、「芥川文庫」と、要するに自分の本だと書いてあるのは、「三百五十部ノ内第二五八号」と書かれていて、番号が柳田の字だということを、山田秀三さんが書いています。では、どうして山田秀三さんの家にこの芥川龍之介の『遠野物語』が来たのかということ、自分の論文、これは『民話の手帖』という雑誌に書いています。ずっと昔に読んで気になっていたのですが、今回、本棚から探してコピーしてきました。その「遠野物語とアイヌ語の地名」という自筆の地図入りの論文の後に、「前記した家内から渡された本は」ということで、「手許の『遠野物語』の話」という話が載っています。なかなかいい話で、ほのぼのとする話ですので、お家に帰ってゆっくりと読んでいただいて、「こういう人もいたのだなあ」と思っていただければと思います。

「前記した、家内から渡された本は、今では綴り糸もほつれてボロボロであるが、遠野物語が好きな方にあるいはと思うこともあるので、その本に付て若干付記することにした。この本は表紙は遠野物語と四文字があるだけで、著者名もない。奥付もない。僅かに巻頭の自序で、著者は柳田國男、書かれ

た年が明治四十三年と分かるだけである。扉の処にゴシックで三百五十部の内第××号とあり、この本ではその間の処に筆で二五八と走り書きが入っている。それから見ると、これだけの有名な本も、初めは僅か三百五十部、印刷を以て謄写に替えた、いわば自費出版だったらしい。自序の中に『こんな本を印刷して無沙法の仕業なりと云う人あらん』と書かれているのを見て、何だか変な気がするのであった。裏表紙の処にはペンで「一九一〇年十一月三日 芥川文庫」と書いてある。一九一〇年は明治四十三年、つまり本書が書かれた年である。今に名の残る芥川龍之介さんが、刊行の年に、この限定出版の一つを貰うかして彼の書棚に置いた本なのであった。よく分らないが、彼がまだ東京帝国大学文科の学生のころなのであろうか。(正確には第一高等学校一年生) この本が片山広子女史の手に渡ったのが何年だったかは知らない。女史は佐々木信綱門下の閨秀歌人、またアイルランド文学の草分けとされていた文学者(ペンネーム松村峰子)で、芥川さんが文学の上の先輩として敬愛していたことは古い人たちが覚えている。(堀辰雄君はそれをモデルにして小説『聖家族』を書いた)。芥川さんが、これはいい本ですよと広子女史に渡したのではなかろうか。本の処々に歌の雑誌の断片とか、少女歌劇の新聞広告の切り抜きが、栞(しおり)の代りに挟まれていた。女史が水ノ江滝子のファンだったのを思い出して笑った。とにかくあの物語と柳田先生の美しい文を愛読されたのであろう。女史の一人娘が私の家内。彼女もこの本が好きで、それを持って嫁に来たものらしい。これが私の遠野物語の歴史なのであった。ガタガタになってはいるが、とにかくたぶん柳田先生の筆跡であろう番号が書き込まれ、若かりし芥川さんのペン書きが残されているその本を膝の上に置いて頁をめくり、地名を拾い出しながらこの稿を書いた。それにしても、こんなに面白くもない調査報告になってしまったのだが。』(『民話の手帖』昭和63年1月)

山田がこの文章を『民話の手帖』に載せたのは、アイヌ語を研究している千葉大の中川裕さんに勧められてのことだと言われていますが、ほのぼのとしたいい文章だと思います。奥さんのひと言がいいですし、そこで出してきた本が、芥川龍之介の本というのもすごい話ですね。山田がこの文を書いた少し前に、奥さんが亡くなっていますので、どうしても書き残しておきたかったのでしょう。

この本は今どこにあるかという、北海道立アイヌ民族文化研究センターのなかの山田秀三文庫に大切に保管されているそうです。

では、芥川がどのように「遠野物語」を評価したかということなのですが、大正13年3月に芥川の「澄江堂雑記」というのが『隨筆』という本に収録されるのですけれども、資料をご覧ください。「二十六 家」という文章があります。これは、早川孝太郎という、柳田の弟子と言っても問題ないと思う人物ですが、その早川の『三州横山話』という本が面白いと評価している文です。この本は、大正10年に、郷土研究社から出る『炉辺叢書』の1冊として刊行されます。芥川は、早川が集めた三河の土地の話、とくに「まじない」を引用して、「家」に生命を感じた昔の人の感情に思いをはせた後に、「なほ次手に広告すれば、早川氏の「三州横山話」は柳田國男氏の「遠野物語」以来、最も興味のある伝説集であらう。」と述べています。今の分類では、「伝説集」というのは正確ではないかもしれませんが、この当時、いろいろな意味で「伝説」という言葉が使われていたと考えれば、不思議ではありません。いずれにしても、芥川は、早川の『三州横山話』は、『遠野物語』に次いで、久々の本だと紹介しているのです。

こうなると、この本を読んでもたくなりますよね。早川孝太郎という人は、花祭りなどの芸能面での研究で知られていますが、私は今まであまり関心なかったのですが、柳田が関西方面に講演旅行をした帰りに、三河まで連れてきて、地元の民俗研究者たちを集めて柳田を囲む「座談会」などを企画しますので、年譜作成上、興味がでてきたところでした。そこで、私は、先週、成城大学の柳田文庫に行って、この本を見てきました。予想通り、柳田の自筆の書き入れ本がありました。この本は、表紙に、「索引用」と書いてあって、索引項目に印をしたものなので、柳田の感想や注文などは、書いていなかったのが残念でしたが、「資料」をご覧ください。薄くて見づらいのですが、「×」は、項目をとるという印で、項目名になりそうな言葉には、「」が付けられています。

たとえば、「犬をつれて山にある男」には、文章のなかの「犬乞食」という言葉に、「」が付けられてい